

連載「大友時代を生きた人々」

## 国際文化学部鹿毛敏夫教授の 「狩野元信～瑞峯院の墨絵画家～」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2016年11月26日(土)

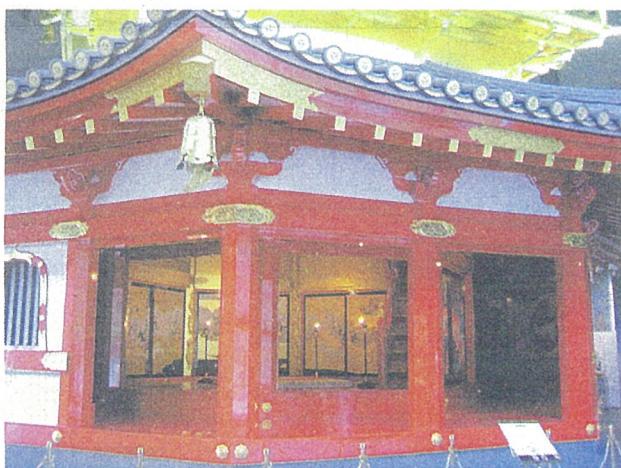
日本の絵画史の中で、狩野派は中世後期から近世にかけて巨大な派閥を形成しました。

特にその創始者狩野正信に始まり、元信、松栄と続く室町から戦国期の親・子孫3代の時期に流派が組織化され、狩野派は日本画壇での中心勢力と化します。そして16世紀後半の永徳の時期に、画壇での支配的地位を確立します。

永徳が織田信長の依頼を受けて安土城内の障壁画を描いたことは広く知られ、その鮮やかな絵は滋賀県近江八幡市の「安土城天主信長の館」に復元されています。狩野派と政権との関係は畿内中央のみの問題で

ではなく、実は九州の大名権力とも深いつながりを保ちました。

### 瑞峯院の墨絵画家



復元された安土城天主と狩野派の障壁画＝滋賀県近江八幡市

### 狩野 元信

## 大友時代を生きた人々

鹿毛 敏夫



いることが見逃せません。

推測できます。

注目されるのは、真珠庵

賢」とは中国の魏末晋初に河南省の竹林に隠れた嵇康、阮籍ら7人（竹林七賢）、「四皓」は同じく秦

16世紀半ばの天文年間、豊後の大友義鎮（宗麟）は、京都に瑞峯院を創建します。瑞峯院は大徳寺の広

塔頭で、義鎮によるその創建は寺に残る史料から天文21（1552）年のこと

に残る「瑞峯院客殿」記の中の「瑞峯院客殿」の襖絵についての次の記録です。

豊後の大友義鎮（宗麟）は同じく秦

力とも深いつながりを保ちながら、創作活動を行つて

ながる、義鎮創建瑞峯院の客殿（現方丈）には、礼之間や

七賢四皓、古法眼筆」、「中之間、墨絵」とする絵は、16世紀の日本

中之間などの複数の部屋があり、それぞれにテーマを持つ襖絵が描かれていたのです。

七賢四皓図」としては、東京国立博物館が蔵する六曲一双のびょうぶ絵があり、瑞峯院客殿中之間の襖絵も同様の絵柄だつたと考えられます。

その作者は松栄。残念ながらその絵は同院に伝わっていませんが、松栄が描いた

これら瑞峯院客殿画の制作を仮に同院創建の天文21年と想定すると、家督を継

他の花鳥図はボストン美術館などに複数現存します。一方、中央部の中之間に

作を仮に同院創建の天文21年と想定すると、家督を継

は墨絵の「七賢四皓」の図が「古法眼」なる人物によつて描かれたとあります。

（名古屋学院大学国際文

化部教授、大分市出身）

の父元信のこと。そして「七賢」は中国の魏末晋初に河南省の竹林に隠れた嵇康、阮籍ら7人（竹林七賢）、「四皓」は同じく秦